

原 著

## 大学生活における被奉仕志向性尺度の作成

Development of the scale of service-seeking orientation in a college life

大和田智文\*<sup>1</sup>  
鈴木 公啓\*<sup>2</sup>  
川田 素子\*<sup>3</sup>

**要約：**本研究では、現代の大学生の「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」のように捉える他者に対する受動的・消極的な傾向を、「権利意識に基づいて相手が落ち度なく与えてくれることを当然視したり、自分の義務を放棄することに対する相手の許容を当然視する傾向」であるとし、これを「被奉仕志向性」とよび、この「被奉仕志向性」を現代の大学生のコミュニケーション・スキルの低さを規定する一因と仮定した。その上で、本研究では、大学生の大学生活における被奉仕志向性を測定する「被奉仕志向性尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。大学学部生計857名を対象に予備調査を含めた4つの調査を行った結果、「被奉仕志向性尺度」は2つの下位尺度より構成されることが確認され、その信頼性と構成概念妥当性が検証された。したがって、本研究は、現代の大学生の「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」といった捉え方を特徴とする認知傾向を、2つの下位概念からなる「被奉仕志向性」という心理的構成概念として位置づけることができた点において意義があったと考えられた。

**Key Words：**被奉仕志向性, 大学生, コミュニケーション・スキル, 信頼性, 妥当性

### 問題と目的

青年期は、人間性や社会性の獲得・形成のために非常に重要な時期である。少なくとも青年心理学を中心とする従来の諸理論では、青年期は身体的、心理・社会的な変化に伴い、対人関係のあり方にも大きな変化が現れる時期だと考えられてきている。すなわち、これまでは親や教師といった大人に守られた存在であったものが、そこから一歩踏み出し、自分は他者とは異なった独立した存在であることを強く意識するようになる。青年は「自分とはいったい何者なのか」という普遍的命題に直面し、それに対する答えを探し求める過程で自らの社会的役割を見出し、その役割実験を繰り返しながら漸く先の命題に対する答えへと辿り着く。これがいわゆる「自我の確立」(Erikson, 1959)といわれるものであろう。役割実験においては、新たに形成されつつある価値観や信念の

妥当性の検証のために、それらを相互に開示し、受け止め、意見を言い合うことのできる対象が必要となる。すなわち、これまでは表面的な関係にとどまっていた友人関係が、お互いに「真の友人(すなわち親友)」と認め合うことができるほどに親密なものへと質的に変化していくのもこの青年期における特徴の一つであるといえる(西平, 1990)。もちろん、青年期を特徴づける対人関係が「親友」の存在だけではないことは明らかだが(たとえば「恋人」の存在などもそうであろう)、少なくとも「親友」という、対人関係における新たな存在の出現は、これまで青年が行ってきた対人コミュニケーション・スタイルに否応なく変化をもたらし、新たな対人コミュニケーション・スタイルの構築を迫る主要な要因の一つとなっていることは間違いないだろう。

しかしながら、近年、本来濃密な対人関係を築きうるはずの青年において、対人関係のあり方が全般的に希薄化し、表面的でお互いの領域を侵さないような関係を形成しようとする傾向がみられるとの指摘がある(岡田, 1993a, 1993b, 1995, 2012)。また、橋本(1997a, 1997b, 2000)は、ときに対人葛藤を伴うような濃密な

2013年7月1日受付 / 2013年8月21日受理

\* 1 Tomofumi OWADA

関西福祉大学 社会福祉学部

\* 2 Tomohiro SUZUKI

東京未来大学 こども心理学部

\* 3 Motoko KAWATA

流通科学大学 非常勤講師

対人関係よりも円滑な対人関係を築くことを重視する独特な傾向が現代の大学生には存在するとして、現代の大学生が他者との対立を避け波風を立てないような関係を維持する傾向にあることを示唆している。このように、従来青年期における友人関係を特徴づけていた「親友」という濃密な対人関係を表す概念は、現代の青年の対人関係のあり方とは整合しないものになりつつあるようにも思われる（岡田，2005）。それにともない、とりわけ大学生のコミュニケーション・スキル（以下「CS」と記載）の低下が一部で報告されるようになってきている（堀川・柴山，2006；牧野，2013）。

堀川・柴山（2006）は、大学生のCSの低下の現われとして、言いたいことを言わない（言えない）傾向があることを指摘している。本来、円滑な対人関係の構築に求められる主要な条件は、「言いたいことを言わずに我慢して波風を立てない」ことではなく、「意見や不満など言いたいことがあれば、相手の立場にも配慮して適切にそれを主張する」ことであるはずである。この主張を可能にするスキルはアサーション・スキルとよばれ、対人コミュニケーションにおける重要性が広く知られている（Alberti & Emmons, 1970; 平木, 1993）。上記の堀川・柴山（2006）の指摘がアサーション・スキルの不足に起因するものであるならば、現代の青年がかつてのような濃密な対人関係を築きえないでいる主要な要因としてアサーション・スキルの獲得機会の少なさを挙げることができよう。したがって、たとえば大学生に対するアサーション・トレーニングを中心とした心理教育を実施するなど、まずはCSの向上に寄与できるような取り組み（堀川・柴山，2006；小出・稲谷，2009）も必要となる。

しかし、さらに近年になって、現代の青年のCSの低下に関する新たな指摘がなされている。これまで、「言いたいのに言えない」主要な要因はアサーション・スキルの不足であると考えられていたが、それに対してたとえば大和田（2011）は、「言わなくてもやってくれるのが当然」のように捉える特異な傾向があるからこそ言わないだけであると主張する。これに従うと、現代の大学生は、アサーション・スキルの構成要素である「主張性」や「他者への配慮」が欠如しているというよりは、むしろ、「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」のように捉える他者に対する受動的・消極的な傾向をより強くもっているのではないかと想像できる。このような傾向は、相手との円滑なコミュニケーションの障害となるだけでなく、日常における全般的な

対人関係を狭く浅いものにとどめる要因ともなるため、本来日常の対人関係から得られるはずのさまざまな機会や報酬を奪い、生活の質そのものを大きく低下させる可能性も考えられる。もしもそうであれば、こうした事態を招かないためにも上記のような他者に対する受動的・消極的な傾向を過度に高めないようにするための手立てが求められる。そのためにはまず、大和田（2011）の指摘するような傾向を概念定義した上で、それを正しく測定することが必要となる。

「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」のように捉える他者に対する受動的・消極的な傾向は、日本人に特徴的であるといわれる「甘え」（土居，1971）との関連が考えられる。土居（1971）によれば、「甘え」とは、他者から与えられる愛情のもとで自分の意のままに振舞いたいという感情や欲求であるとされる。大和田（2011）の主張する上記の傾向は、「自ら何もせずとも相手は自分に注目しているべきである」という対他的期待を含むものであると考えられる。一方、土居（1971）の主張する「甘え」は、「ある特定の他者からの愛情をあらかじめ自己に取り付けておくことで、その他者のもとでは不適切な行動をとったとしてもその愛情ゆえに許容されるであろう」という対他的期待を含む概念だと考えられる。すなわち、この2つの概念の間には、他者に対し愛情や注目を無言のうちに強要するものである点において共通性を見出すことが可能であろう。しかしながら、大和田（2011）の主張する傾向が、自分自身は他者に対し無言のうちに愛情や注目を強要するのみで、可視的な働きかけは一切行おうとはしないものであるのに対し、土居（1971）の「甘え」は可視的な働きかけの実行可能性も想定される概念であるため、この点において大和田（2011）の主張する傾向と「甘え」とは区別されよう。

このように土居の「甘え」では、他者に対する可視的な働きかけの実行可能性も想定されるが、この可視的な働きかけが実際に実行されるかどうかは問題とされていない。仮に実行されないのであれば、「自分の意のままに振舞いたいという感情や欲求」は満たされることはなく、また実行されたとしても、その振舞いが常に他者から受容され、その結果上記の感情が満たされるとは限らない。したがって、「甘え」は、結果的に人を「甘えが満たされず、これ以上は甘えたくても甘えられない」状態に導く要素を内包する概念であると捉えることができよう。土居（2001）は、このような甘えたくても甘えら

れず「甘え」が満たされていない状態は、屈折した自己愛的心理に近いものであると述べている。

稲垣（2007）は、自己愛を上記のような、これ以上は甘えたくても甘えられないゆえの要求がましい甘えという視点から検討し、「自己愛的甘え」という概念を提出している。稲垣（2007）は、「自己愛的甘え」を「『甘え』が満たされず、甘えたくとも甘えられないゆえに、一方的で要求がましい自己愛的要求を伴う『甘え』（稲垣，2007，p.15）と定義し、「屈折の甘え」（「甘えたいのに甘えられないがゆえに、他者に素直に甘えをむけることができず、一方的でゆがんだ形態をとる甘え」（稲垣，2007，同））、「配慮の要求」（「他者に対して自分に特別な配慮をむけてくれることを要求し、周囲がその要求に応じないと不満を感じる傾向」（稲垣，2007，同））、「許容への過度の期待」（「周囲の人々から許容されるであろうという過度の期待を持つ傾向」（稲垣，2007，p.16））の3つの下位尺度からなる「自己愛的甘え尺度」を作成している。すなわち「自己愛的甘え」とは、「他者にむけられた自覚的・無自覚的な不適切な要求」の一形態であると考えられる。よって、「他者に不適切な要求をむける」点においては「自ら何もせずとも相手は自分に注目しているべきである」という大和田（2011）の主張とも一貫している。しかしながら、大和田（2011）の主張する傾向は、既述のように「自分自身は他者に対し無言のうちに愛情や注目を強要する」という、おそらくは無自覚的側面のみを含むものである点において、「自己愛的甘え」とも区別される概念だと考えられる。ただし、他者に対する不適切な要求が自覚的か無自覚的かを問わない場合、大和田（2011）の主張する傾向は、「自己愛的甘え」の2つの下位尺度（すなわち、「配慮の要求」および「許容への過度の期待」）と相当程度に関連があるという予想が可能ではある。しかし、現時点ではこれまでに提出されている関連概念のいずれとも上に示した諸点において区別される概念であると考えるのが妥当であろう。

そこで本研究では、既述の「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」といった捉え方を特徴とする認知傾向を、「権利意識に基づいて相手が落ち度なく与えてくれることを当然視したり、自分の義務を放棄することに対する相手の許容を当然視する傾向」とし、これを「被奉仕志向性」とよぶこととする。そして、この「被奉仕志向性」を大学生のCSの低さを規定する一因と仮定する。また「被奉仕志向性」

の中の「相手が落ち度なく与えてくれることを当然視する傾向」を「配慮的奉仕の期待」、「相手の許容を当然視する傾向」を「許容的奉仕の期待」とし、この2つに概念上の区別を設ける。

本研究では、「大学生の大学生生活における被奉仕志向性を測定する尺度（以下「被奉仕志向性尺度」と記載）」を作成し、その信頼性と妥当性を検討することとする。

なお本研究では、「大学生の大学生生活における被奉仕志向性」を、「大学生が学内の生活において、教職員や友人、大学そのものなど、大学生自身と関わりを持つ他者から奉仕の態度で接してもらうことを当然のように思う程度についての認知的枠組み」と操作的に定義する。

このような「権利意識に基づいて相手が落ち度なく与えてくれることを当然視したり、自分の義務を放棄することに対する相手の許容を当然視する傾向」である「被奉仕志向性」は、自分はただそこにいるだけで周りが自分のために何でもやってくれるのが当然と捉えるような、誇大的・自己中心的傾向、かつ、既述のような他者に対する要求がましい傾向を含むものであると考えられる。このことから、稲垣（2007）の「自己愛的甘え」に加え、「自己愛」（Kernberg, 1975）<sup>1)</sup>の中の誇大的・自己顕示的側面のようなパーソナリティ特性とも関連していることが考えられる。以上より、本尺度の構成概念妥当性の検討（調査1）では、稲垣（2007）によって作成された「自己愛的甘え尺度」、原田（2009）によって作成された「自己愛人格尺度」の下位尺度の一つである「自己関心・共感の欠如尺度」、および中山・中谷（2006）によって作成された「評価過敏性一誇大性自己愛尺度」の下位尺度の一つである「誇大性尺度」を用いることとする。

### 予備調査

本調査は、「被奉仕志向性尺度」を作成するための予備調査項目の収集および予備調査項目群の確定を目的とする。

### 方法

**調査対象** 兵庫県内の私立大学1年次生から3年次生計172名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は授業時間を利用して一斉に配布された。

**質問紙構成** 質問紙は、計42項目からなる被奉仕志向性尺度予備調査項目および年齢など人口統計学的変数を尋ねる項目により構成されていた。被奉仕志向性尺度予備調査項目は、「1（全くそう思わない）」から「7（と

てもそう思う)」の7段階で評定させるものであった。

被奉仕志向性尺度予備調査項目は以下の手順で選定された。2010年5月下旬に、私立大学社会福祉学部の学生11名を対象にインタビュー調査を行った。調査の内容は、「あなたと関りのある他者(教員、職員、友人、大学そのものなど)はあなたに対してどのようなことを当然すべきと考えるか」について、自由に意見を述べてもらうものであった。回答結果につき、筆者ら3名が内容的妥当性に関する検討を行い、被奉仕志向性尺度の予備調査項目の一部を作成した。同時に、第1著者の所属大学の研究者1名を含む計4名の研究者で、上記とは別に予備調査項目案を検討し作成した。これらをあわせ、さらに内容的妥当性の検討を行い、計42項目からなる

被奉仕志向性尺度予備調査項目群が選定された。

調査時期 2010年7月中旬であった。

有効回答 156名分の回答を回収し、そこから回答に不備のあった7名と本調査が調査対象とする一般的な大学生の年齢から大きく外れる2名を除外したところ、有効回答者は149名(男性57名、女性91名、不明1名)、有効回答率は86.6%、平均年齢は18.81歳(SD=0.67)となった。なお、1名については年齢が不詳であったが、一般的な大学生の年齢に相当することが受講者情報より明らかであったため有効回答者に含めた。

結果

回答に大きな偏りの生じた12項目を除外の上、計30項目につき因子分析(主因子法、プロマックス回転)

Table 1 被奉仕志向性予備調査項目得点の因子分析結果(n=149)

	F1	F2
F1: 配慮的奉仕の期待		
教員が私のやる気を引き起こすような授業をすることを、私は当然と思うことがある	.786	.064
大学が学生のことを第一に考えて物事を決定することを、私は当然と思うことがある	.737	-.092
教員が私に分かりやすいように板書をすることを、私は当然と思うことがある	.655	-.218
教員は私が理解するまで教えることを、私は当然と思うことがある	.652	.088
大学が必要な連絡事項を全学生に周知徹底することを、私は当然と思うことがある	.634	-.132
教員のオフィスアワーが十分に確保されていることを、私は当然と思うことがある	.631	.048
教員は、私がノートを取り終えてからパワーポイントのスライドを進めることを、私は当然と思うことがある	.558	-.008
教員がパワーポイントの内容をプリントして学生に配布することを、私は当然と思うことがある	.547	.103
大学が授業などの予定を変更する際には私のスケジュールにも配慮することを、私は当然と思うことがある	.516	.090
教員が学生に笑顔で接するのを心がけることを、私は当然と思うことがある	.515	.196
F2: 許容的奉仕の期待		
教室で通路から遠い側に座っているときに退室したくなったら、周りの学生は私のために席を立つことを、私は当然と思うことがある	-.205	.857
廊下で誰かとすれ違うとき、私が通りやすいように相手が脇によけることを、私は当然と思うことがある	-.083	.679
私が授業に遅刻して教室に入るようなときでも、周りの人(教員や他の学生)はそれを許容することを、私は当然と思うことがある	-.067	.661
教員から私にあいさつしてくることを、私は当然と思うことがある	-.138	.656
私のために友だちが席を確保しておいてくれることを、私は当然と思うことがある	.078	.620
私が単位を落としたりとしても、教員は交渉次第でそれを撤回してくれる可能性があることを、私は当然と思うことがある	.151	.519
私が教室の場所が分からないときは、周りにいる人は親切に教えることを、私は当然と思うことがある	.208	.500
私が友だちにノートを貸してくれと頼んだら、頼まれた友だちはノートを貸すことを、私は当然と思うことがある	.166	.470
友だちが私と一緒に遊んでくれることを、私は当然と思うことがある	.216	.464
M	4.361	3.231
SD	1.604	1.520
$\alpha$	.865	.850
因子間相関		F2
	F1	.587

を行った。固有値の減衰状況 (10.658, 2.592, 1.692, 1.472, 以下省略) と解釈可能性から、2 因子解での解釈が妥当であると判断した。そこで、因子を 2 に指定の上再び因子分析を行った。その結果、因子負荷量が .45 未満を示した項目 (4 項目) と 2 つの因子に .35 以上の負荷量を示した多重負荷項目 (2 項目)、項目間で相関の高い (.70 以上) 項目のうち因子負荷量の小さい方の項目 (3 項目) を削除することとした。また、内容的にも再検討し、項目内容が似通っていると判断された項目のうち因子負荷量の小さい方の項目 (1 項目) と、項目内容が不適と判断された 1 項目についても削除した。その上で、最終的に 19 項目について因子を 2 に指定の上因子分析を行った。回転後の因子負荷量を Table 1 に示した。抽出された 2 因子につき解釈を行い、それぞれ「配慮的奉仕の期待」、「許容的奉仕の期待」と命名された。これらは当初仮定した下位概念とも一致するものであった。

クロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、尺度全体で  $\alpha = .899$ 、「配慮的奉仕の期待」で  $\alpha = .865$ 、「許容的奉仕の期待」で  $\alpha = .850$  と十分な値を示したため、この段階において本尺度の信頼性の一部が確認されたものとする。

## 調査 1

本調査では、既述のように「被奉仕志向性尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

**方法**

**調査対象** 兵庫県内の私立大学 1 年次生から 4 年次生、東京都内の私立大学 1 年次生、京都府内の私立大学 2 年次生および 3 年次生、および滋賀県内の私立大学 2 年次生から 4 年次生計 286 名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は授業時間を利用して一斉に配布された。

**質問紙構成**

① 被奉仕志向性尺度および被奉仕志向性行動関連項目 予備調査で作成された 19 項目からなる「被奉仕志向性尺度」を実施した。予備調査時と同様、それぞれの項目につき、「1 (全くそう思わない)」から「7 (とてもそう思う)」の 7 段階で評定させた。

またこれに加えて、被奉仕志向性尺度をもとにした行動関連項目もあわせて実施した。行動関連項目をあわせて実施した理由以下の通りである。すなわち、被奉仕志向性尺度はある特定の認知的枠組みを測定する尺度であるが、この認知的枠組みを測定する尺度を用いて後の

CS に基づく行動を予測するような場合、認知—行動という二次的隔たりが生じてしまう。そこでこの二次的隔たりを媒介する変数を組み入れることによって、CS に基づく行動の予測を容易にしようと考えた。二次的隔たりを媒介する変数は、被奉仕志向性から生じる行動傾向を捉えるものであることがふさわしいと考えられるため、本調査では、被奉仕志向性尺度をもとにした行動関連項目を用いることとした。具体的には、被奉仕志向性尺度の 19 項目を用い、それぞれの項目につき「その思いが生じたとき、つい相手や周りの人達に不平を言うてしまう」かどうかを「0 (いいえ)」、「1 (はい)」の 2 段階で尋ねるものであった。

② 自己愛的甘え尺度 32 項目からなる「自己愛的甘え尺度」を実施した。本尺度は、「配慮の要求」(11 項目)、「許容への過度の期待」(12 項目)、「屈折的甘え」(9 項目)の下位尺度から構成される。このうちの「配慮の要求」は被奉仕志向性尺度の「配慮的奉仕の期待」に、「許容への過度の欲求」は被奉仕志向性尺度の「許容的奉仕の期待」に概念的な対応関係があるものと考えられた。それぞれの項目につき、「0 (全くない)」から「4 (いつもある)」の 5 段階で評定させた。

③ 自己関心・共感の欠如尺度 23 項目からなる「自己愛人格尺度」の下位尺度の一つである「自己関心・共感の欠如尺度」を実施した。「自己愛人格尺度」は「自己関心・共感の欠如」(12 項目)、「誇大性」(11 項目)の下位尺度から構成されるが、本調査では被奉仕志向性が強い個人は自己愛の中の誇大的・自己顕示的側面も強いだろうと予測したため、上記下位尺度のうち妥当性が検証されたとする「自己関心・共感の欠如尺度」のみを使用した。それぞれの項目につき、「1 (全く当てはまらない)」から「7 (非常に当てはまる)」の 7 段階で評定させた。

④ 誇大性尺度 18 項目からなる「評価過敏性—誇大性自己愛尺度」の下位尺度の一つである「誇大性尺度」を実施した。「評価過敏性—誇大性自己愛尺度」は「評価過敏性」(8 項目)、「誇大性」(10 項目)の下位尺度から構成されるが、本調査では、被奉仕志向性が強い個人は自己愛の中の誇大的・自己顕示的側面も強いだろうと予測したため、「誇大性尺度」のみを使用した。それぞれの項目につき、「1 (全くあてはまらない)」から「5 (とてもあてはまる)」の 5 段階で評定させた。

⑤ 人口統計学的変数 年齢、性別、所属、現在の居住地、出身地について尋ねた。

**調査時期** 2010年11月下旬から2011年1月下旬であった。

**有効回答** 275名分の回答を回収し、そこから回答に不備のあった9名と本調査が調査対象とする一般的な大学生の年齢から大きく外れる2名を除外したところ、有効回答者は264名（男性103名、女性159名、不明2名）、有効回答率は92.3%、平均年齢は19.49歳（SD =1.21）となった。なお、4名については年齢が不詳であったが、一般的な大学生の年齢に相当することが受講者情報より明らかであったため有効回答者に含めた。

**結果**

**被奉仕志向性得点の因子分析および信頼性の検討** 被奉仕志向性尺度19項目について、予備調査時と同様に

因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。初期固有値を1.0以上としたところ、3つの因子が抽出された。共通性が.30に満たなかった項目が2項目あったため、これらを削除の上再び因子分析を行った。ここでも共通性が.30に満たなかった項目が1項目あったため、これを削除の上再び因子分析を行った。その結果、2項目のみ第3の因子への負荷が大きかったためこの2項目を削除の上再び因子分析を行った。ここで因子負荷量が.45未満を示した項目（2項目）を削除し、最終的に12項目について因子分析を行った。回転後の因子負荷量をTable 2に示した。

2因子が抽出されたが、各項目の因子への負荷は予備調査時と同様の傾向であったため、本調査において被奉

Table 2 被奉仕志向性得点の因子分析結果(n =264)

	F1	F2
F1：許容的奉仕の期待		
私が友だちにノートを貸してくれと頼んだら、頼まれた友だちはノートを貸すことを、私は当然と思うことがある	.770	-.128
私が授業に遅刻して教室に入るようなときでも、周りの人（教員や他の学生）はそれを許容することを、私は当然と思うことがある	.745	-.127
友だちが私と一緒に遊んでくれることを、私は当然と思うことがある	.656	.124
教室で通路から遠い側に座っているときに退室したくなったら、周りの学生は私のために席を立つことを、私は当然と思うことがある	.607	-.032
私のために友だちが席を確保しておいてくれることを、私は当然と思うことがある	.585	.074
私が教室の場所が分からないときは、周りにいる人は親切に教えることを、私は当然と思うことがある	.568	.189
F2：配慮的奉仕の期待		
教員が私のやる気を引き起こすような授業をすることを、私は当然と思うことがある	-.016	.750
大学が学生のことを第一に考えて物事を決定することを、私は当然と思うことがある	-.071	.653
教員は私が理解するまで教えることを、私は当然と思うことがある	.051	.639
教員が学生に笑顔で接するのを心がけることを、私は当然と思うことがある	-.080	.628
大学が必要な連絡事項を全学生に周知徹底することを、私は当然と思うことがある	-.026	.583
教員がパワーポイントの内容をプリントして学生に配布することを、私は当然と思うことがある	.224	.465
M	3.176	4.404
SD	1.569	1.590
$\alpha$	.824	.789
因子間相関		F2
	F1	.569
関連尺度との相関		
許容への過度の期待	.430***	
配慮の要求		.284***
自己関心・共感の欠如	.203***	.193**
誇大性	.232***	.180**
行動関連項目	.390***	.404***

\*\* p <.01 \*\*\* p <.001

仕志向性尺度の2因子解が改めて確認された。以上より、予備調査時に命名された「許容的奉仕の期待」、「配慮的奉仕の期待」が被奉仕志向性尺度の下位尺度とされた。

クロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、尺度全体で $\alpha = .852$ 、「許容的奉仕の期待」で $\alpha = .824$ 、「配慮的奉仕の期待」で $\alpha = .789$ であった。「配慮的奉仕の期待」が若干低いものの、全体的にみれば信頼性は十分高いといえよう。

**構成概念妥当性の検討** まず、被奉仕志向性尺度と自己愛的甘え尺度の相関を検討した。ここでは、被奉仕志向性尺度の「許容的奉仕の期待」と自己愛的甘え尺度の「許容への過度の期待」が、また被奉仕志向性尺度の「配慮的奉仕の期待」と自己愛的甘え尺度の「配慮の要求」がそれぞれ概念的に対応していると考えられたため、これら対応関係にあると仮定した下位尺度間の相関を検討することとした。その結果、「許容的奉仕の期待」と「許容への過度の期待」の間と「配慮的奉仕の期待」と「配慮の要求」の間のいずれにも有意な正の相関がみられた ( $r = .430$  and  $.284$ ,  $ps < .001$ )。このことから、被奉仕志向性が甘えたくても甘えられない要求がましい甘えと関係していることが示されたため、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の一部が確認された。

次に、被奉仕志向性の2つの下位尺度と「自己関心・共感の欠如」、同様に2つの下位尺度と「誇大性」との相関を検討したところ、いずれにも弱いながらも有意な正の相関がみられた ( $r = .203$ ,  $p < .001$ ;  $r = .193$ ,  $p < .01$ ;  $r = .232$ ,  $p < .001$ ;  $r = .180$ ,  $p < .01$ )。このことから、被奉仕志向性が自己愛の中でも特に誇大的・自己顕示的側面と関係していることが示されたため、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の一部が確認された。

**被奉仕志向性行動関連項目との相関** 被奉仕志向性行動関連項目（以下「行動関連項目」と記載）の得点は、CSに基づく行動の成熟度を示す一指標と考えられるため、被奉仕志向性得点がもしも行動関連得点に連動して変化するものであることが確認されるならば、被奉仕志向性得点からCSに基づく行動を予測することも可能になると考えられる。そこで被奉仕志向性尺度と行動関連項目の相関を下位尺度ごとに検討したところ、「許容的奉仕の期待」、「配慮的奉仕の期待」ともに中程度の有意な正の相関がみられた ( $r = .390$  and  $.404$ ,  $ps < .001$ )。この結果は、後のCSに基づく行動を予測するための認知的枠組みとして被奉仕志向性を測定することが適切であることを示唆するものといえよう。

## 考察

以上のように、被奉仕志向性尺度は、それぞれ6項目からなる2つの下位尺度により構成されるものであることが確認された。2つの下位尺度とは「許容的奉仕の期待」と「配慮的奉仕の期待」であり、これらはともに当初仮定した下位概念とも一致するものであったため、被奉仕志向性尺度はその定義とも一致する内容的に妥当なものであったといえよう。

また、被奉仕志向性との関連が予測された「自己愛」の中の誇大的・自己顕示的側面や、「甘え」の中の「甘えたくても甘えられないゆえの要求がましい甘え」といったパーソナリティ特性を測定する諸尺度との間に、それほど強いものではないながらも有意な正の相関がみられたことから、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性も検証されたものと考えられる。

したがってここまでの検討により、当初予想していた「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」のように捉える他者に対する受動的・消極的な傾向を、2つの下位概念からなる「被奉仕志向性」という心理的構成概念として位置づけることの妥当性が確認されたとみてよいであろう。

また行動関連項目との関係では、中程度の有意な正の相関がみられた。しかしながら、これに関してはやや議論を要する点でもあろう。というのは、この行動関連項目はそもそも被奉仕志向性から後のCSに基づく行動を予測する上で、認知—行動次元間をインターフェイスする重要な媒介変数であると考えられていた。この役割を担う媒介変数は被奉仕志向性から生じる行動傾向を捉えるものであることがふさわしいと考えられたため、行動関連項目は被奉仕志向性尺度をもとに作成されていた。したがって、もしも被奉仕志向性と行動関連項目との間に比較的強めの相関がみられたならば、認知—行動次元間の隔たりは小さいと考えられ、被奉仕志向性は後のCSに基づく行動の有力な予測変数になる可能性が高まることとなる。しかし、現時点でのこの相関は中程度であったため、認知—行動次元間の媒介変数については他にもふさわしいものがあるかさらに検討を加えていくことが望まれる。

このような課題も踏まえた上で、調査2では、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の収束的・弁別的側面の検討を行い、本尺度を完成させることとする。

## 調 査 2

被奉仕志向性とは、権利意識に基づいて相手が落ち度なく与えてくれることを当然視したり、自分の義務を放棄することに対する相手の許容を当然視する傾向のことであった。これは、たとえば困っている人を見たときに思わず同情してしまうような「他者指向的反応」の欠如や、相手の立場に立って相手を理解しようとする「視点取得」の欠如（ともに「共感性」に関する概念）とも関連するのではないかと考えられる。さらに、一般的に他者はそれほど奉仕的に接してくれるものではないため、人は多くの場合被奉仕志向性が十分に満たされるような環境に置かれているとは考えにくい。もしも被奉仕志向性が高い個人がこの志向性を十分に満たすことができないような場合、それを満たしてくれない相手に対して怒りや敵愾心といった不快な感情を喚起することも予想できるため、被奉仕志向性は他者への「攻撃性」とも関連することが考えられる。以上の理由から、本尺度の構成概念妥当性の収束的側面の検討には、安藤・曾我・山崎・島井・島田・宇津木・大芦・坂井（1999）によって作成された「日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（以下「BAQ」と記載）」を、弁別的側面の検討には、鈴木・木野（2008）によって作成された「多次元共感性尺度（以下「MES」と記載）」より、本尺度と理論的に関連する「他者指向的反応」および「視点取得」の各下位尺度を用いることとする。

### 方 法

**調査対象** 兵庫県内の私立大学1年次生から4年次生117名、東京都内の私立大学1年次生から4年次生166名、および京都府内の私立大学2年次生から4年次生22名計305名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は授業時間を利用して一斉に配布された。

### 質問紙構成

① 被奉仕志向性尺度 12項目からなる「被奉仕志向性尺度」を実施した。それぞれの項目につき、「1（全くそう思わない）」から「7（とてもそう思う）」の7段階で評定させた。

② 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ） 24項目からなる BAQ を実施した。それぞれの項目につき、「1（まったくあてはまらない）」から「5（非常によくあてはまる）」の5段階で評定させた。

③ 多次元共感性尺度（MES）の2つの下位尺度 24項目からなる MES より、本尺度と理論的に関連する「他者指向的反応」（5項目）、「視点取得」（5項目）の

各下位尺度を実施した。それぞれの項目につき、「1（全くあてはまらない）」から「5（とてもよくあてはまる）」の5段階で評定させた。

④ 人口統計学的変数 年齢、性別、所属について尋ねた。

**調査時期** 2011年11月下旬から2012年1月下旬であった。

**有効回答** 297名分の回答を回収し、そこから回答に不備のあった26名と本調査が調査対象とする一般的な大学生の年齢から大きく外れる1名を除外したところ、有効回答者は270名（男性105名、女性161名、不明4名）、有効回答率は88.5%、平均年齢は19.06歳（SD = 1.10）となった。なお、5名については年齢が不詳であったが、一般的な大学生の年齢に相当することが受講者情報より明らかであったため有効回答者に含めた。

### 結 果

**被奉仕志向性得点の因子分析および信頼性の検討** 被奉仕志向性尺度12項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。初期固有値を1.0以上としたところ、調査1と同様の2つの因子が抽出された。回転後の因子負荷量を Table 3 に示した。各項目の因子への負荷も調査1と同様の傾向であったため、本調査において被奉仕志向性尺度の2因子解が改めて確認された。以上より、予備調査および調査1で命名された「配慮的奉仕の期待」、「許容的奉仕の期待」をそのまま被奉仕志向性尺度の下位尺度とした。

クロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、尺度全体で $\alpha = .864$ 、「配慮的奉仕の期待」で $\alpha = .847$ 、「許容的奉仕の期待」で $\alpha = .823$ となり、本尺度は十分に信頼性の高いものであることが確認された。

**構成概念妥当性の検討** まず、被奉仕志向性の2つの下位尺度とBAQの4つの下位尺度（「短気」、「敵意」、「身体的攻撃」および「言語的攻撃」）の相関をそれぞれ検討したところ、「配慮的奉仕の期待」および「許容的奉仕の期待」と「短気」との間に有意な正の相関がみられた（ $r = .198, p < .01$ ;  $r = .122, p < .05$ ）。このことから、被奉仕志向性が不快な感情の喚起の中でも特に「短気」と関連していることが示されたため、非常に弱いながらも被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の収束的側面が確認された。

次に、被奉仕志向性の2つの下位尺度と「他者指向的反応」、同様に2つの下位尺度と「視点取得」との相関を検討したところ、「配慮的奉仕の期待」と「他者指向

的反応」との間に有意な正の相関がみられた ( $r = .161$ ,  $p < .01$ )。被奉仕志向性は、「他者指向的反応」・「視点取得」の欠如と関連するだろうと予測をしていたため、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の弁別的側面は検証されなかった。

考 察

以上のように、被奉仕志向性尺度は、それぞれ6項目からなる2つの下位尺度により構成されるものであることが本調査において改めて確認された。すなわち、各項目の因子への負荷は調査1と同様の傾向となり、またクロンバックの $\alpha$ 係数も十分に高い値が示された。このことから、本尺度の信頼性は十分に高いものであると結

論づけられよう。

また、被奉仕志向性と、被奉仕志向性との関連が予測された「攻撃性」を測定するBAQの下位尺度との間には、「短気」と有意な正の相関がみられたことから、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の収束的側面は弱いながらも検証されたものと考えられる。

一方、被奉仕志向性との関連が予測された「他者指向的反応」・「視点取得」の欠如との間に負の相関を確認することはできなかったため、構成概念妥当性の弁別的側面は検証されなかった。このことは、「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」のように捉える他者に対する受動的・消極的な傾向の高い

Table 3 被奉仕志向性得点の因子分析結果( $n = 270$ )

	F1	F2
F1：配慮的奉仕の期待		
大学が学生のことを第一に考えて物事を決定することを、私は当然と思うことがある	.839	-.098
教員が学生に笑顔で接するのを心がけることを、私は当然と思うことがある	.733	-.026
教員が私のやる気を引き起こすような授業をすることを、私は当然と思うことがある	.699	.097
教員は私が理解するまで教えることを、私は当然と思うことがある	.685	.063
教員がパワーポイントの内容をプリントして学生に配布することを、私は当然と思うことがある	.614	.075
大学が必要な連絡事項を全学生に周知徹底することを、私は当然と思うことがある	.599	-.072
F2：許容的奉仕の期待		
私が友だちにノートを貸してくれと頼んだら、頼まれた友だちはノートを貸すことを、私は当然と思うことがある	-.041	.816
私が授業に遅刻して教室に入るようなときでも、周りの人(教員や他の学生)はそれを許容することを、私は当然と思うことがある	-.093	.703
教室で通路から遠い側に座っているときに退室したくなったら、周りの学生は私のために席を立つことを、私は当然と思うことがある	-.084	.646
私が教室の場所が分からないときは、周りにいる人は親切に教えることを、私は当然と思うことがある	.133	.614
友だちが私と一緒に遊んでくれることを、私は当然と思うことがある	.075	.597
私のために友だちが席を確保しておいてくれることを、私は当然と思うことがある	.087	.577
<i>M</i>	4.411	3.089
<i>SD</i>	1.549	1.533
$\alpha$	.847	.823
因子間相関		F2
	F1	.539
関連尺度との相関		
短気	.198**	.122*
敵意	.083	-.058
身体的攻撃	.034	-.003
言語的攻撃	.017	.102
他者指向的反応	.161**	.012
視点取得	.099	.024

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

個人が、自発的に他者の心理的観点をとることや他者に対する同情や配慮など他者指向的な感情（鈴木・木野, 2008）を喚起することが困難になるわけではないことを示している。

ここまでの検討により、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の検討の一部が今後の課題として残されはしたが、調査1における構成概念妥当性の結果をあわせて考えるならば、本尺度の信頼性および妥当性はほぼ検証されたため、本尺度が完成されたとみて差し支えないであろう。

ただし、上に指摘した通りであるが、本調査では被奉仕志向性と「他者指向的反応」・「視点取得」の欠如との関連性が見出されていなかった。よって、調査3では被奉仕志向性を適切に弁別できるような概念の検討を通して、本調査では解明できなかった点についての理論の精緻化を試みることをとする。

### 調査3

被奉仕志向性は、「自己愛」の中の誇大的・自己顕示的側面、「甘えたくても甘えられないゆえの要求がましい甘え」および「短気」と有意な正の相関がみられたが（調査1, 調査2）、「他者指向的反応」との間には予想に反して正の相関がみられた（調査2）。

本調査では、高被奉仕志向者の中には、低CS者と、それとは別次元の高共感者とが混在している可能性があるものと考え、CSの程度および共感性と、被奉仕志向性との関連を検討していく。

なお、CSの程度は、「社会的スキルの欠如」などを健常成人から高機能臨床群までスペクトラムで評価できる、若林・東條（2004）によって作成された「自閉症スペクトラム指数日本語版（以下「AQ」と記載）」を、共感性については、調査2と同様にMESの2つの下位尺度（「他者指向的反応」および「視点取得」）を用い

ることとする。

### 方法

**調査対象** 兵庫県内の私立大学1年次生から4年次生計94名を対象に質問紙調査を実施した。

#### 質問紙構成

① 被奉仕志向性尺度 12項目からなる「被奉仕志向性尺度」を実施した。各項目につき、「1（全くそう思わない）」から「7（とてもそう思う）」の7段階で評定させた。

② 多次元共感性尺度（MES）の2つの下位尺度 24項目からなるMESより、本尺度と理論的に関連する「他者指向的反応」（5項目）、「視点取得」（5項目）の各下位尺度を実施した。それぞれの項目につき、「1（全くあてはまらない）」から「5（とてもよくあてはまる）」の5段階で評定させた。

③ 自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版 50項目からなるAQを実施した。各項目につき、「1（あてはまらない）」から「4（あてはまる）」の4段階で評定させた。

④ 人口統計学的変数 年齢、性別、所属について尋ねた。

**調査時期** 2012年10月上旬であった。

**有効回答** 93名分の回答を回収し、そこから回答に不備のあった4名を除外したところ、有効回答者は89名（男性46名、女性42名、不詳1名）、有効回答率は94.7%、平均年齢は18.87歳（SD=0.93）となった。なお、2名については年齢が不詳であったが、一般的な大学生の年齢に相当することが受講者情報より明らかであったため有効回答者に含めた。

### 結果と考察

被奉仕志向性尺度とMESおよびAQとの相関係数を求め、Table 4に示した。その結果、「許容的奉仕の期待」と「他者指向的反応」および「視点取得」との間に有意

Table 4. 被奉仕志向性尺度とMESおよびAQとの相関係数(n=89)

		被奉仕志向性	
		F1 配慮的奉仕の期待	F2 許容的奉仕の期待
MES	他者指向的反応	.070	-.273 **
	視点取得	.071	-.194 †
AQ	社会的スキルの欠如	-.189 †	-.103
	注意の切り替えの欠如	-.005	-.099
	細部への注意の欠如	.052	.003
	低コミュニケーション	.020	.024
	想像力の欠如	-.010	-.008

†  $p < .10$  \*\*  $p < .01$

なもしくは有意傾向の負の相関がみられた ( $r = -.273$ ,  $p < .01$ ;  $r = -.194$ ,  $p < .10$ ). すなわち、高被奉仕志向者ほど共感性が低くなる傾向にあることが示された。したがって、本調査では、調査2における当初の仮説と一貫した結果が得られた。また、被奉仕志向性とCSの程度とはほぼ無関連であることが示された。

よって、本調査では、被奉仕志向性と共感性との関連については期待された結果が示されたことになるが、本調査の有効回答者は89名であったため、結果の信頼性を担保するためには同様の調査を繰り返し実施し結果の安定性を確認していく必要がある。その上で「被奉仕志向性」の概念についての精査を再度行い、これまで確認されてきた理論的矛盾(調査2と調査3で示された結果の相違など)を解明するための検討を行っていくことが今後の課題として考えられた。

### 総合考察

本研究は、大学生の大学生生活における被奉仕志向性を測定する尺度(「被奉仕志向性尺度」)を作成し、その信頼性と妥当性を検討することが目的であった。

調査1および調査2の結果より、本尺度はそれぞれ6項目からなる2つの下位尺度(すなわち「配慮的奉仕の期待」および「許容的奉仕の期待」)により構成されるものであることが確認された。

また調査1では、本尺度と、「自己愛」の中の誇大的・自己顕示的側面や「甘えたくても甘えられないゆえの要求がましい甘え」といったパーソナリティ特性を測定する諸尺度との間に有意な正の相関がみられたことから、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の一部が検証された。また、本尺度の信頼性も十分に高いものであることが検証された。

調査2では、被奉仕志向性尺度と、「攻撃性」を測定するBAQの下位尺度である「短気」との間に有意な正の相関がみられたことから、被奉仕志向性尺度の構成概念妥当性の収束的側面が弱いながらも検証された。また、BAQの他の3つの下位尺度との間には関連性は見出されなかった。このうちの「身体的攻撃」と「言語的攻撃」は、ともに攻撃性の行動的な表出傾向を意味するが、被奉仕志向性は対人コミュニケーションに関する一認知傾向であるため、これらを測定する尺度間には行動一認知という次元的な隔たりがあったことが考えられる。そのために、被奉仕志向性と「身体的攻撃」、「言語的攻撃」の間に関連性を見出すことができなかつたのではないかと推

測できる。また、同様に被奉仕志向性との関連がみられなかつた「敵意」であるが、これは他者に対する不快な感情喚起(すなわち、対他的な認知)というよりはむしろ、相手に対する猜疑心を自分自身がどれほど感じるか(すなわち、対自的な認知)を意味するものと捉えることができる。これに対して被奉仕志向性は、これまで述べてきたような対人コミュニケーションに関する一認知傾向であるため、明らかに対他的な認知傾向として捉えることができる。そうすると、これらの尺度間には対自一対他という次元的な隔たりがあるものと考えられるが、そうであればこの次元的な隔たりが被奉仕志向性と敵意との間に関連性を見出せなかつた一因になったとも考えられよう。

一方、「他者指向的反応」・「視点取得」の欠如との間に負の相関を確認することはできなかつたため、構成概念妥当性の弁別的側面は検証されなかつた。このことは、「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」のように捉える他者に対する受動的・消極的な傾向の高い個人が、自発的に他者の心理的観点をとることや他者に対する同情や配慮など他者指向的な感情(鈴木・木野, 2008)を喚起することが困難になるわけではないことを示しているが、なぜそうなるのか、その理由については本研究(調査3までを含む)において解明されるには至らなかつた。したがって、今後はこの点についての理論の精緻化をさらに進めていくのと同時に、被奉仕志向性の概念定義の再考の余地についても改めて検討していく必要がある。

また、結果には記載しなかつたが、調査1では性別および学年別に被奉仕志向性尺度の下位尺度得点を算出しその違いを検討した。結果は、「許容的配慮の期待」が男性において高くなる傾向が示された。これは有意傾向にとどまるものであつたため、その理由について解釈することは避けたい。今後同様の調査を追加実施した上で、これが安定的な傾向なのか改めて検証される必要がある。また、調査2では調査対象者の学年による偏りが大きかつたため、下位尺度得点の学年別による検討は実施できなかつた。したがって、被奉仕志向性は大学生生活全般における対人関係を経験することによってはたして低まっていくものなのか現時点では不明である。よって、この点に関しては標本抽出をさらに適切に行うなど、今後調査実施上の工夫が求められる。

本研究は、現代の大学生の「言わずとも察してくれたり、言わずとも許してくれるのが当然」のように捉える

他者に対する受動的・消極的な傾向を、2つの下位概念からなる「被奉仕志向性」という心理的構成概念として位置づけることができた点において意義があったと考える。ただし、上記のような今後に解明が期待されるいくつかの課題も残った。したがって、それらを克服することができれば、本研究にはさらに以下のような発展可能性が考えられる。

本研究では、「被奉仕志向性」を大学生のCSの低さを規定する一因と仮定していた。そのため、個人の被奉仕志向性得点をもとにして、たとえばアサーション・スキルといったCSに基づく行動の予測が可能となる。さらに、CSに基づく行動表出の予測可能性が低い個人に対しては、このような行動を促すための介入プログラムを開発していくことも可能であろうから、本研究はそのための基礎的資料にもなりうる。加えて、CSに基づく行動の予測モデルの提案なども、変数の影響過程を明示できるという点で将来的な介入プログラムの実施に際し有用となろう。また、調査1では被奉仕志向性得点に学年による違いがみられなかったが、仮に初年次生と上級年次生との間に、あるいは他の大学の学生との間に被奉仕志向性に何らかの質的相違がみられるのだとすれば、そこが介入プログラムの実施のポイントにもなりうる。

このように、被奉仕志向性尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討という本研究における一連の検討は、後のCSに基づく行動の予測やそのような行動を促す介入プログラムの開発のための足がかりを築いていくことにも貢献できるものであったと考える。

#### 引用文献

Alberti, R.E., & Emmons, M.L. (1970). *Your perfect right: A guide to assertive behavior*. San Luis Obispo, California: Impact Publishers. (アルベルティ, R.E.・エモンズ, M.L. 菅沼憲治・ジャレット純子 (訳) (2009). 自己主張トレーニング 改訂新版 東京図書)

安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・島田洋徳・宇津木成介・大声治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.

土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂

土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂

Erikson, E.H. (1959). *Psychological issues: Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.

原田新 (2009). 新たな自己愛人格尺度の作成 神戸大学大学

院人間発達環境学研究科研究紀要, 2, 241-248.

橋本剛 (1997a). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.

橋本剛 (1997b). 現代青年の対人関係についての探索的研究—女子学生の面接データから— 名古屋大学教育学部紀要 心理学, 44, 207-219.

橋本剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.

平木典子 (1993). アサーション・トレーニング—さわやかなく自己表現—のために— 金子書房

堀川徳子・柴山謙二 (2006). 現代の大学生に対するアサーション・トレーニングの効果について 熊本大学教育学部紀要 人文科学, 55, 73-83.

稲垣実果 (2007). 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究 パーソナリティ研究, 16, 13-24.

Kernberg, O.F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.

小出京・稲谷ふみ枝 (2009). 大学生を対象としたストレスマネジメント教育プログラム開発—アサーション・トレーニングを中心としたプログラム— 久留米大学心理学研究, 8, 61-68.

牧野幸志 (2013). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと精神的健康—同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルと精神的健康との関連— 経営情報研究, 20, 35-47.

中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.

西平直喜 (1990). 成人になること—生育史心理学から— 東京大学出版会

岡田努 (1993a). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.

岡田努 (1993b). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.

岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.

岡田努 (2005). 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇, 25, 15-32.

岡田努 (2012). 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成—傷つけ合うことを回避する傾向を中心として— 金沢大学人間科学系研究紀要, 4, 19-34.

大和田智文 (2011). 若者における自己の定位と社会的適応

榎本博明（編）自己心理学の最先端 自己の構造と機能を科学する あいり出版 pp.300-310.

鈴木有美・木野和代（2008）. 多次元共感性尺度（MES）の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, 56, 487-497.

若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S.（2004）. 自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— 心理学研究, 75, 78-84.

#### 注

1) Kernberg（1975）の述べる「自己愛」は、Kernberg自身の臨床経験に基づいて提唱された概念であるため、「被奉仕志向性」と同義であるとは考えにくい。しかしながら、自己愛性人格障害にみられる尊大さや他者への共感の欠如など誇大性や自己顕示性を示唆する諸特徴は、被奉仕志向性にも共通する特徴であると考えた。

#### 付記

本研究は、平成22年度および平成23年度に受けた本学地域社会福祉政策研究所の共同研究助成により実施された2つの調査研究結果の一部に別の調査研究結果を加え、再考察を行ったものである。また本研究の調査1は日本心理学会第75回大会において、調査2は日本心理学会第76回大会において発表された。

## 資 料 大学生活における被奉仕志向性尺度

以下にいくつかの考え方が挙げられています。その内容を読み、それがあなた自身にどの程度あてはまるか回答してください。

	全くそう思わない	そう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	そう思う	とてもそう思う
教室で通路から遠い側に座っているときに退室したくなったら、周りの学生は私のために席を立つことを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
私が授業に遅刻して教室に入るようなときでも、周りの人(教員や他の学生)はそれを許容することを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
私が友だちにノートを貸してくれと頼んだら、頼まれた友だちはノートを貸すことを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
私が教室の場所が分からないときは、周りにいる人は親切に教えることを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
友だちが私と一緒に遊んでくれることを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
大学が必要な連絡事項を全学生に周知徹底することを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
教員が私のやる気を引き起こすような授業をすることを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
大学が学生のことを第一に考えて物事を決定することを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
教員は私が理解するまで教えることを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
教員がパワーポイントの内容をプリントして学生に配布することを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
私のために友だちが席を確保しておいてくれることを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7
教員が学生に笑顔で接するのを心がけることを、私は当然と思うことがある	1	2	3	4	5	6	7